疑う力と学ぶ力

金融コンサルティング部　グループマネージャー　伊部　和晃

大規模言語モデルをはじめとする生成 AI 技術の普及は、私たちの仕事や生活に革命的な変化をもたらしている。今後は、面倒な仕事は AI に任せ、人間が楽をできる世界へ向かっているようにも見える。

しかし、知的労働の現場で生成 AI に日々触れていると、むしろ考える量も深さも増しているのではないかと感じることがある。生成 AI が吐き出す流ちょうな文章の正しさを確かめるとともに、自分の言葉として再構成する工程が絶えず発生するからだ。そして、私たちが生成 AI を利用し続けるためには、これまで以上に高度な知的能力が要求されつつあることにも気づかされる。中でも特に重要なものは「疑う力」と「学ぶ力」ではないだろうか。

OpenAI が 2025 年 4 月に公表した報告書では、4,000 問の事実確認テストの結果、最新の推論モデルである o3 のハルシネーション率は 51% と、従来型モデル（o1）の 44% よりも高いハルシネーション率が報告されている。推論能力の向上で、鋭い考察は可能となったが、ハルシネーションの懸念はむしろ高まっている。もし私たちが生成 AI の出力をうのみにしてしまえば、自らが誤情報の拡散源になり、しかも内容を説明できない、虎の威を借る狐（きつね）となってしまう。当面の間は、生成 AI の出力を「本当にそうか?」と問い直す習慣は欠かせない。

先日、「シンギュラリティ後の金融経済教育」という難解そうなテーマを、最新の推論モデルへ投げかけたことがある。返ってきた文章は、筆者の予想を超えた異分野の用語が多く、論理も飛びがちで、一読して理解できない。「これは典型的なハルシネーションだ」と切り捨てかけたが、斬新な用語の組み合わせの中には光るものがあった。対話前にはなかった疑問と関心が次々と生まれ、さまざまな文献を通じた調査を行うことで、新しい概念を学ぶきっかけとなった。疑いが学びのエンジンに変わった瞬間である。

生成 AI の利活用における「学ぶ力」とは、疑いの過程で見つかった知識の空白を埋め、自らの知識を継続的に高める力であるといえるだろう。生成 AI は参考文献や事例を大量に提示してくれるが、その正当性や文脈の適合性を確認し、得た情報を血肉化するのは人間にしかできない。

疑う力と学ぶ力は、そもそも知的労働において極めて重要な能力である。しかし私たちは「人間が作った、信頼できそうな文章」を前に、そこに書かれた事実や論理構造を疑うこともせず、新しい学びの機会につなげることも怠っていたのではないか。

生成 AI を日々活用する中で、私たちは疑う力を鍛え、学びを深める機会を得る。生成 AI は単なるツールではなく、私たちの可能性を広げ、知的成長を促すパートナーであるといえよう。

当レポートに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。すべての内容は日本の著作権法および国際条約により保護されています。
Copyright© 2025 Nomura Research Institute, Ltd. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.